

派遣者番号	管 30K07	氏 名	高橋 洋之
研究主題 —副主題—	特別支援教育の知見を生かした授業づくりに関する一考察 -授業のユニバーサルデザインを活用した小学校社会科の非連続型テキスト読み取り場面における支援の効果-		
派遣先	玉川大学教職大学院	担当教官	谷 和樹
所属校	江東区立明治小学校	校長	喜名 朝博

キーワード：インクルーシブ教育 授業のユニバーサルデザイン 小学校社会科 非連続型テキスト

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

平成29年に文部科学省が行った調査によれば、義務教育段階の児童生徒数は989万人で、平成19年の調査から約86万人減少している。一方で平成19年と比較すると、特別支援学校に通う児童生徒数が約1.2倍、特別支援学級に通う児童生徒数が2.1倍、通常の学級から通級指導学級に通う児童生徒の数は約2.4倍に増加している。また、通常の学級において6.5%程度、発達障害の可能性のある児童生徒が在籍している可能性が示された。

平成24年7月中央教育審議会初等中等教育分科会「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」では、どの子ども「同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児・児童・生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる」ようにする必要があることが示された。このことは、合理的配慮に基づいて通常の学級において学習面・生活面での必要な支援を適切に行っていくことが今後求められていくことを示している。

アメリカでは1980年代から、CASTが中心となって学びのユニバーサルデザインを提唱し、「全ての学習者のニーズに合った教育をどのようにつくっていくかを理解するための枠組み」について幅広い実践が行われてきた。

我が国においても、授業のユニバーサルデザイン研究会を前身とする日本授業UD学会が2015年に設立され、「全員が楽しく学び合い『わかる・できる』授業づくり」の追究のための実践研究が重ねられている。授業のユニバーサルデザイン(以下、授業UD)では、「発達障害がある子だけでなく、全ての子にとって参加しやすい学校、わかりやすい授業」を目指している。

本研究では、小学校社会科の非連続型テキストの読み取り場面に注目し、授業UDの手法を用いた資料提示方法の有効性について検証することとし、研究の目的を以下のように設定する。

小学校社会科学習における非連続型テキストの読み取り場面において授業のユニバーサルデザインの

視点から指導法を工夫することが、どの子ども『わかる』『できる』授業の支援にとって有効であることを提示する。

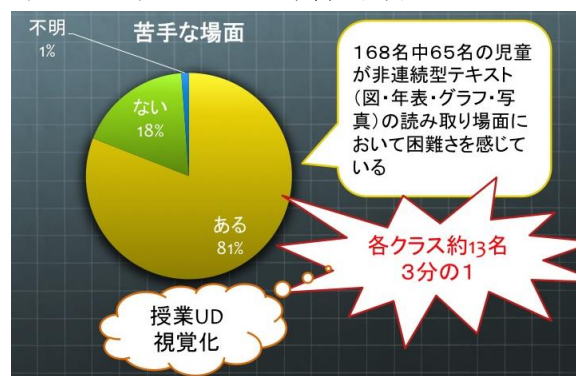
2 研究の内容・研究の方法

研究仮説を基に、教科書で扱われている非連続型テキストを抽出し、視覚資料としての提示方法を経時的に示したり、情報を限定したりすることが、児童の理解を促すことにつながったか考察する。

東京都江東区M小学校第6学年5学級172名を対象に検証授業を行い、授業UDの手法を用いた場合の効果測定を実施した。

図1「児童がもつ社会科の学習への苦手意識」

児童がどういった点に学習の困難さを感じている



かを調査した結果が図1である。苦手な場面があると答えた81%の児童に、どういった場面に苦手意識を感じるかを調査した。その結果65名の児童が、非連続型テキストの読み取り場面に困難さを感じていることが分かった。各学級約13名程度の児童が、非連続型テキストの読み取り場面で困難さを抱えていることになる。

以上のような実態を踏まえ、以下の5単元の学習において授業UDの手法を活用した授業を実施した。

(1)「武士の世の中」

- UD①人物と人々の出来事の経過の視覚化
- UD②人物年表による比較する視点の明確化

(2)「今に伝わる室町文化」

- UD③人物と出来事の順序の視覚化
- UD④人物と文化財を関連付けたワークシート

(3)「3人の武将と天下統一」

- UD⑤アップとルーズによる資料提示

(4) 「江戸幕府と政治の安定」

UD⑥ ダウトを使った比較

UD⑦ ブラインドを使った比較

(5) 「世界に歩みだした日本」

UD⑧ 折れ線グラフの棒グラフへの分解

UD⑨ 柱状グラフの分解と視覚化による比較

3 研究の結果



図2 「検証授業 (1) から (4) を終えた結果」

検証授業 (1) から (4) を終えた結果が図2である。77% (168名中135名) の児童が授業UDを用いた手法について分かりやすいと答えている。児童の記述を見ると「順番に見ると、写真のつながりや資料の意味が分かりやすい」「分けて順番に見た方が分かりやすくてすごく頭に入ってくる」といった肯定的な反応が多く見られた。この結果から、「ブラインド」「アップとルーズ」「ダウト」といった提示方法で資料を経時的に示したことの有効性が確かめられたと考える。

一方、各クラス一定数の割合で「教科書資料の方が分かりやすい」と答えた児童が2割程度存在した。児童の記述を見ると「分けて見るより、一度に見て比べる方が分かりやすかった。」「(教科書は) 全体的にまとめてあるので一連の流れが分かるから。」といったような反応が見られた。このことは、授業UDの手法によって経時的に示した場合よりも、見開き1ページを同時処理的に見た方が理解を促される児童が存在していることを示していると考えられる。

グループ 順序	組	折れ線グラフ			柱状グラフ		
		UD 無	どちらでもない	UD 有	UD 無	どちらでもない	UD 有
A. 無一有	1組	8	0	20	5	0	23
	2組	2	5	25	1	4	27
B. UDのみ	3組	9	1	22	4	1	27
C. 有一無	4組	9	0	23	1	2	29
	5組	10	0	21	8	1	22
合計		38	6	111	19	8	128

図3 「検証授業 (5) を終えた結果」

検証授業(5)を終えた結果が図3である。どちらの場合においても授業UDの手法を用いた方について児童が分かりやすいと答えている。

折れ線グラフの分解については、棒グラフに表すこ

とで児童は「出来事があった年だけを示しているの、工場の数、働く人の数、出来事と関連付けやすいから」「目盛りが見やすいから変化が分かりやすい」といった肯定的な反応が見られた。一方で「折れ線グラフの方が上がり方や下がり方の違いが細かく分かる。」「(棒グラフだけだと) ある年代しか見られないので、細かい年代が見られる折れ線の方が変化が分かりやすいから。」といった反応も見られた。折れ線グラフを棒グラフにすると、指導者が意図的に年代を抽出して提示するため、情報が限定的になってしまう。細かい変化を見ていくには折れ線グラフの方が有効な場合があることを示している。特に、1910年前後を境として工場数が減少していることに着目した児童は「韓国併合によって工場が移っていったのではないか」といったような、追究していくための視点となる考えをもつ姿が見られた。

柱状グラフの分解については、折れ線グラフの場合と比べて分かりやすいと答えた児童が増えていた。柱状グラフについては、20年間の輸出入の品目や金額の変化を捉えるための多様な情報が入っているためと考える。児童は「分解した方が比べやすく分かりやすいから。また、金額が一つずつあることにより、そのものだけで比べることが可能だから」「金額は分かりやすい。石炭は%が減っているので金額が減っているように見えるが、実際は増えているような変化が(柱状グラフでは) 見にくいから。」のように、今回の提示方法について肯定的に捉えている児童が多い。ワークシートの記述を見ると、百分率で見ると綿花は20年間で7倍増えているが、金額で見ると30倍以上に増加している。綿花だけでなく、石炭の輸出や砂糖の輸入における割合と金額の関係についても同様の指摘ができる。このことから、実際の変化について百分率で示された場合、貿易構造の変化を十分に理解できていない児童が存在していることが考えられる。

4 研究の考察

検証授業を通して、ブラインドやダウトといった授業UDの手法を用いることの有効性を見いだすことができた。また一見複雑に見える統計資料の提示方法においても、先行研究の手法を用いた場合と同様の結果が得られたことから、有効性が確認できた。資料を視覚化することについては、これまで様々な研究授業の場面において部分的に用いられてきた。しかし、児童一人一人の理解を促す手法として確立しているとは言えない。これからの授業づくりにおいて今回行った授業UDの手法を効果的に活用していくことが、どの子も分かる授業づくりの一助になると考える。